

授業科目の概要

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科 共通科目	実 施 育 に 課 程 す る 編 成 域 及 び	教育課程編成の 今日的課題	本講義は、3つのアプローチで、今日的な教育課程の編成の課題について検討する。まず、主として文献を講読しながら、学力観、幼稚園教育要領・学習指導要領の変遷とそれに応じた教育課程の編成について整理する。次いで、現行の学習指導要領の特徴（基礎基本の徹底、思考力・判断力・表現力の育成、生きる力の育成、教育の情報化への対応等）に基づき、いくつかの学校園の教育課程の編成を評価し、その改善点を考察する（事例分析）。そして、最後に、所属校園または実習予定校の学力実態を踏まえ、その向上を目指す教育課程編成案を策定する。	共同
		カリキュラム・ マネジメントの 理論と実践	「カリキュラム・マネジメント」概念の台頭に至る、カリキュラム開発研究の理論的発展について考察する。また、そのモデルをもとに、好事例に接近する。さらに、幼稚園教育要領および学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの重要性や「主体的・対話的で深い学び」との関係についても論ずる。	共同
	指 導 科 法 等 に 関 す る 実 践 的 領 域	学習指導の 実践的展開	児童・生徒に資質・能力を育成するための習得・活用・探究型授業の実践的手法をその理論的背景と共に提示する。受講生がグループを構成し、各グループが研究課題をもち、授業を組み立てる。その後、その授業を実践し、学校現場からの評価を得ることなどの方法を考え、研究課題の特徴を実証的に分析する。最後に各グループの経験が共有化されるように、得られた知見をレポート集としてまとめる。以上を通して授業実践手法のレパトリーを広げるとともに、実証的な効果研究の手法を身につけられるようにする。	共同
	相 生 談 に 指 導 す る 領 域	生徒指導と教育相談 の実践的課題	学校現場における子どもの心理的・発達的問題の基礎的理論を講義し、およびそれに基づく対処方法について、理論的・実践的検討をワークショップ形式も取り入れながら行っていく。具体的には、最新の研究知見に基づいた諸問題のメカニズム、および今学校現場で実際に起こっている事例を紹介する。その上で、グループディスカッション等を通じて、受講者自身が当該問題に関して主体的に考える機会も併せて提供する。	共同
	経 営 に 関 す る 領 域	学校経営と学級経営 の理論と実践	学校経営と学級経営について理論的に整理し、実践事例について検討する。学校の自律・協働・参加を軸にした学校づくりの枠組を考えながら、事例にそって問題分析する。特に、教職員の協働、児童生徒の学級集団づくり、学校と地域の連携、学校と教育委員会のパートナーシップなどをテーマに扱い、学校の教育活動の組織化について理解を深める。そして、実践事例を検討することを通して、組織人としての発想と実践力を育てていく。 (なお、本科目で対象とする「学校」は、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校である。)	共同
	在 学 に 関 す る 領 域	教師力と学校力	本講義は、教職大学院の第IVセメスターに位置づく。それゆえ、受講者は、教職大学院における学びを「教師力」と「学校力」という視点で総覧するとともに、それを高めるためのプランを具体的に検討する。そのために、まず、受講者は、「教員の育成指標」をツールとして、それまでの教職大学院における学びを整理する。また、自らの力量を総点検し、それを高めるための行動計画を策定し、それを相互に批評する。次いで、受講者は、「チーム学校」の考え方をもとに、実習校等の学校改革の方途を構想し、交流する。	共同
	現 代 的 教 育 科 目	教育研究方法演習	複合的分野といわれる教育研究は、研究の目的や条件に沿って、必要な研究方法を組み合わせることで研究課題を明らかにするとされる。本授業では「実践課題研究」に向けて、それぞれが取り組む研究の特性と課題に即して、より適切な研究方法を選択できる広い知識と学術的技術を修得するため、教育研究の分野で主に用いられている研究方法に焦点を絞り、理論を踏まえて事例をもとにそれぞれの手法を学ぶ。いくために必要とされる実践的能力と危機管理に携わる基礎的な対応能力の育成を目指す。	共同

研究科共通科目	現代的教科目	学校安全と危機管理	<p>三段階予防（1次予防・2次予防・3次予防）の観点から、これからの学校園における安全推進を目的とした安全教育・安全管理や組織活動の展開を担う教員にとって必要とされる基本的事項について解説する。さらに学校安全の先導的な事例の紹介や実際の活動への参加・見学、また具体的な学校危機事例に基づく演習を通じて、これからのわが国の教育現場における学校安全の現状を改善・発展させていくために必要とされる実践的能力と危機管理に携わる基礎的な対応能力の育成を目指す。 （オムニバス方式／全15回） （／9回）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校園における安全教育（生活安全領域）の課題と今後の展開 ・不審者対応訓練を通じた危機管理マニュアルの実践的活用 ・教育行政の視点から考えられる今後の課題 ・チーム学校の視点から考えられる今後の課題 ・諸外国における学校安全と危機管理の現状と今後の課題 ・まとめ （／2回） ・学校園における安全教育・管理（災害安全領域）の課題と今後の展開 （／1回） ・学校園における安全教育・管理（災害安全領域）の課題と今後の展開 （／3回） ・学校事故対応や学校危機介入の基本的な姿勢 ・1次予防の観点から、学校安全の実際 （／3回） ・2次予防の観点から、学校危機発生後の心のケア ・3次予防の観点から、学校危機発生後の学校・学級経営 （／15回） 	共同・オムニバス
	人権教育の課題と実践	<p>本講義では、第一に、教職員の人権意識の現状と課題について、各自の自己洞察を踏まえ、幾つかの調査結果を用いながら考察する。第二に、戦後の同和教育から現在に至るまでの人権教育実践事例の中から、いくつかの転換点となった事例を用いて、各自の実践をふりかえり、人権教育の今後の在り方について考察する。第三に、経験の少ない教職員の人権感覚を養うために、人権教育研修に求められる今日的課題について事例を通して学ぶ。上記により、学校におけるChange Agent（変革推進者）として改革プランを作成・報告し、相互評価する。なお、本講義は、原則として、参加と協同の原則に基づいてワークショップの手法を用いて行う。</p>		
	健康教育の理解と実践	<p>主として教育課程の特別活動において実践される集団の保健指導を想定し、健康に関する現代的課題の理解、学校教育活動における健康教育実践の知識及び方法を学修させる。 （オムニバス方式／全15回） （／10回）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育と子どもの健康 ・健康課題と予防的介入の視点：対人関係と疾病 ・健康教育実践の方法：1子どもの健康実態の把握 2指導計画の立案 4学習指導案の作成 5授業評価及び介入効果の検討 6個別の健康相談及び保健指導につなげる方法 ・健康教育実践の展開：1学級活動における実践 2児童会活動・生徒会活動における実践 3学校保健委員会における実践 （／3回） ・健康教育の目的と意義 ・健康課題と予防的介入の視点：1生活環境と疾病 2生活習慣と疾病 （／2回） ・健康課題と予防的介入の視点：3生活行動と疾病（危険行動を中心に） ・健康教育実践の方法：3ICTを活用した教材の作成 	オムニバス	
	子どもの貧困及び児童虐待の理解と教育実践	<p>この授業では、貧困や虐待がどのように子どもと教育現場に影響を与えているのかについて、講義やデータ、映像資料から理解を得る。次に、貧困や虐待の被害を受けている子どもが学校現場で抱える課題、たとえば、不登校、いじめ加害・被害、自傷行為、暴言と暴力等々の側面から事例を踏まえ検討する。加えて、教師が使える援助技法について解説する。最後に個別支援と学級集団づくりの文脈の中でどのように支援していけば良いのかについて教師の視点から考える。</p>		
	社会的包摂のための諸施設に関する実践的探究	<p>マイノリティ、障がい、貧困等により不利な状況にある全ての幼児・児童・生徒を包摂する社会的・制度的仕組みを理論的かつ実践的に知るために、乳児院、適応指導教室、児童自立支援施設、児童養護施設等を対象にした理論的学習を行う。また、受講生が分担して本授業科目が指定する機関で実習を行い、そこでの経験を共有化しよう導く。さらに、校内での教員以外の専門職との連携の在り方の実際を实地に知る機会を与える。最後に全体を俯瞰して、インタープロフェッショナル教育の内容を考案するというパフォーマンス課題を与え評価する。</p>	共同	
	特別ニーズ教育の理論と実践	<p>特別なニーズのある子どもの教育をめぐる基本的課題と教育方法や研究方法について、特別支援教育学・特別支援心理学・特別支援臨床学の各専門分野から多角的に講義を行う。講義の内容は特定の障がい種への支援教育や重複障がいへの支援教育だけでなく、それらの教育に必要な医療体制、障がい理解、特別支援教育の理念なども含める。 （オムニバス方式／全15回） （／1回）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育の基本的課題と研究方法 （／1回） ・視覚障がい教育 （／1回） ・聴覚障がい教育 （／2回） ・知的障がい教育 ・特別支援教育と障がい理解 （／3回） ・肢体不自由教育 ・情緒障がい教育 ・重複障がい教育 （／2回） ・病弱教育 ・特別支援教育と健康行動学 （／1回） ・発達障がい教育 （／1回） ・特別支援教育とユニバーサルな授業づくり （／1回） ・特別支援教育と医療体制 （／2回） ・特別支援教育における今日的課題 ・まとめ 	オムニバス	

<p style="text-align: center;">学校実習科目</p>	<p style="text-align: center;">基本学校実習Ⅰ</p>	<p>本科目では1回当たり5時間程度の実習を毎週2回で6週間にわたって実施することを標準とするが、課題やニーズに応じて毎週4回で3週間の実習にすること、あるいは毎週1回で12週間の実習にすることも可とする。</p> <p>【現職教員院生】 勤務する学校や教育委員会において、学校課題を解決しようとするリーダーの諸活動を対象にして、専門職としていかなる専門性を有し、活動を展開しているかについて、観察やその仕事の一部に携わることとおして、全体像を再確認させる。その際には、共通科目における講義等で提示した視点を活用させる。次いで、多様なマネジメント的活動の中から受講者それぞれに追究すべき課題を設定させ、それに基づいた調査や実践を繰り広げさせる。さらに、それらの調査・実践の過程や成果等をポートフォリオに整理して、他の受講者と共有させる。</p> <p>【学部卒院生】 勤務校や免許種に対応する実習校において、授業を開発し学校課題を解決しようとしている教員の諸活動を対象にして専門職としていかなる専門性を有し、活動を展開しているかについて、観察やその仕事の一部にたずさわることとおして、全体像を再確認させる。その際には、共通科目における講義等で提示した視点を活用させる。次いで、多様な授業開発活動の中から受講者それぞれに追究すべき課題を設定させ、それに基づいた調査や実践を繰り広げさせる。さらに、それらの調査・実践の過程や成果等をポートフォリオに整理して、他の受講者と共有させる。</p>	
	<p style="text-align: center;">基本学校実習Ⅱ</p>	<p>本科目では1回当たり5時間程度の実習を毎週2回で6週間にわたって実施することを標準とするが、課題やニーズに応じて毎週4回で3週間の実習にすること、あるいは毎週1回で12週間の実習にすることも可とする。</p> <p>【現職教員院生】 勤務する学校や教育委員会において、学校課題を解決しようとするリーダーの実際の一つの活動の一部または全部を担わせ、当該活動の可能性と課題を多面的・実践的に考察させる。その際には、ポートフォリオを作成させるとともに、関連する共通科目の講義の内容を関連づけさせる。さらに、それを通して、「実践課題研究Ⅰ」のテーマと具体的な研究計画を策定して発表させ、相互批評させる。</p> <p>【学部卒院生】 免許種に対応する実習校において、授業を開発し学校課題を解決しようとしている教員の実際の一つの活動の一部または全部を担わせ、当該活動の可能性と課題を多面的・実践的に考察させる。その際には、ポートフォリオを作成させるとともに、関連する共通科目の講義の内容を関連づけさせる。さらに、それを通して、「実践課題研究Ⅰ」のテーマと具体的な研究計画を策定して発表させ、相互批評させる。</p>	
	<p style="text-align: center;">発展課題実習Ⅰ</p>	<p>課題研究科目で設定する自らの課題に則した実習を行うものであり、実習校としては、基本学校実習と同様の附属学校、併設校、連携協力校において実施する。各自の「実践課題研究テーマ」に沿って、研究を追究するために適切な実習先を選択するとともに、実習中に必要な活動を具体的に計画し研究を遂行する。多様な教育現場を体験するための特別プログラムとして、連携協力校以外の機関において、行政研修、他校種、他機関、他地域、海外などの実習を選択し、当該科目の一部を代替できるものとする。なお、本科目では1回当たり7.5時間程度の実習を毎週2回で6週間にわたって実施することを標準とするが、課題やニーズに応じて毎週4回で3週間の実習にすること、あるいは毎週1回で12週間の実習にすることも可とする。</p> <p>【現職教員院生】 第1、2セメスターでの理論的学習と学校実習科目での実践的学習体験を往還させながら、勤務する学校や教育委員会の組織課題を解決するための取り組みに、勤務校の管理職と調整をしながら、着手させる。そして、その可能性と課題を多面的・実践的に考察させる。その際には、ポートフォリオを作成させるとともに、関連する共通科目の講義の内容を関連づけさせる。さらに、それを通して、実践課題研究Ⅱのテーマと具体的な研究計画を策定して発表させ、相互批評させる。</p> <p>【学部卒院生】 第1、2セメスターでの理論的学習と学校実習科目での実践的学習体験を往還させながら、免許種に対応する実習校における具体的な教育実践の開発に関わる課題に対して、実習校の管理職等と調整を経たのち、独自の工夫を加えた解決を試み、その可能性と課題を多面的・実践的に考察させる。その際には、ポートフォリオを作成させるとともに、関連する共通科目の講義の内容を関連づけさせる。さらに、それを通して、実践課題研究Ⅱのテーマと具体的な研究計画を策定して発表させ、相互批評させる。</p>	
	<p style="text-align: center;">発展課題実習Ⅱ</p>	<p>本科目は発展課題実習Ⅰに続く実習としてその内容をさらに深めるための科目である。課題研究科目における「実践課題研究テーマ」を追究するために適切な実習先を選択するとともに、最終となる実習中に必要な活動を具体的に計画し、研究を完成する。多様な教育現場を体験するための特別プログラムとして、連携協力校以外の機関において、行政研修、他校種、他機関、他地域、海外などの実習を選択し、当該科目の一部を代替できるものとする。なお、本科目では1回当たり7.5時間程度の実習を毎週2回で6週間にわたって実施することを標準とするが、課題やニーズに応じて毎週4回で3週間の実習にすること、あるいは毎週1回で12週間の実習にすることも可とする。</p> <p>【現職教員院生】 第3セメスターでの理論的学習と学校実習科目での実践的学習体験を往還させながら、勤務する学校や教育委員会の組織課題を解決するための試みを、発展課題実習Ⅰの経験を踏まえて改善させ、その可能性と課題を多面的・実践的に考察させる。その際には、ポートフォリオを作成させるとともに、関連する共通科目の講義の内容を関連づけさせる。さらに、それを通して、実践課題研究Ⅱの理論研究の成果とも関連づけて発表させ、相互批評させる。</p> <p>【学部卒院生】 第3セメスターでの理論的学習と学校実習科目での実践的学習体験を往還させながら、実習校や教育委員会の具体的な教育実践の開発に関わる課題に対する独自の工夫を加えた解決の試みを、発展課題実習Ⅰの経験を踏まえて改善させ、その可能性と課題を多面的・実践的に考察させる。その際には、ポートフォリオを作成させるとともに、関連する共通科目の講義の内容を関連づけさせる。さらに、それを通して、実践課題研究Ⅱの理論研究の成果とも関連づけて発表させ、相互批評させる。</p>	

スクー ルリー ダーシ ップコ ース科 目	コ ー ス 共 通 科 目	スクー ルリー ダー シ ップの理論と実践	学校づくりの中核を担うスクールリーダーの役割と行動を学ぶ。リーダーシップの基礎理論、リーダー行動の分析、組織文化の形成などをテーマとする。実践事例やケース教材を基に、スクールリーダーの役割、リーダー行動について多角的に理解し、具体的な行動を考えることを通して、スクールリーダーシップの基礎を培う。なお、本科目で対象とする「学校」は、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校である。	
		エビデンスベースの 学校改革	これからの学校管理職や教員は、エビデンスに基づいたコミュニケーションを創出し、それらをチームとして学校内外を組織的に動かすために活用しなければならない。本講義では、Institutional Researchの基本手法、カリキュラム・マネジメントや学習の形成的評価のための基本的統計的手法を、事例に即しながら、体系的かつ実践的学ぶ場を提供し、そうした手法を現職教員が所属する学校・園に適用できるよう導く。	共同
	管 理 職 プ ロ グ ラ ム 科 目	スクー ルリー ダーの マネジ メント	学校の診断・評価をふまえて学校の戦略を構想し、学校のビジョン・経営計画を作成するマネジメントのあり方を考える。学校づくりのマネジメント・サイクルについて学び、実践方策を考える。学校戦略を支える学校の機能・役割についても基本的な理解を深める。	共同
		学校組織開発	主要な学校組織論を理解し、組織実態を分析し、組織開発のあり方を考える。学校づくりの実践事例を取り上げて、組織開発を実践的・理論的に考えていく。さらに、中長期的視点から学校組織の成長・停滞・衰退という発展段階についても検討していく。	
		チ ーム 学 校の 実 践 的 展 開	教師と他の専門家、学校と学校外組織の連携について、「チームとしての学校」の考え方にに基づき、実践的に検討する。特に、外部リソースの確保と活用 その持続的発展について、所属校等の実態分析や改善方策の策定に着手する。	
	実 践 的 リ ー ダ ー プ ロ グ ラ ム 科 目	学 校に お け る コ ー デ ィ ネ ー タ ー シ ョ ン	学校における教員間の協力や連携について、理論的・実践的に検討する。それらの概念の発展を確認するとともに、その類型や典型事例を考察する。また、その充実に資する実践的リーダーシップ及びコーディネーターの役割 について検討することで、「スクールリーダーシップの理論と実践」の内容を深め、学校での具体的な活用方法を考える。	共同
		子 ど も の 発 達 を 踏 ま え た 生 徒 指 導 の 組 織 的 展 開	心理社会的発達の視点から、近年の児童生徒の現状と課題および、問題行動等の理解を深め、児童生徒理解とそれに基づく組織的な対応について論議する。教育課題の解決に向けた具体的な対応については、問題をかかえる児童生徒への個別の対応とあわせて、グループアプローチを用いた予防開発的な指導援助について学ぶことができるよう展開する。	
		校 内 研 修 の 持 続 的 発 展	校内研修の企画・運営に関する理論と実践の融合を目指す。まず、わが国の校内研修の特徴や課題について歴史的視点、国際比較の視点をふまえ考察する。また、校内研修の企画・運営に関するモデルに基づき、その手続きを整理する。その際には、モデルを用いた、事例分析にも着手する。最後に、受講者自身がたずさわってきた校内研修を点検・評価する作業、その改善プランを作成する活動を通じて、校内研修の企画・運営に関する学術的知識と実践的知識の統合を図る。	
	教 育 委 員 会 指 導 主 事 プ ロ グ ラ ム 科 目	学 校に 対 す る コ ン サ ル テ ー シ ョ ン	本講義では、学校に対して外部から助言を繰り返す（コンサルテーション）ための視点と方法の会得を目指す。コンサルテーションの概念を整理するとともに、そのモデルを会得する。次いで、コンサルテーションの実際について事例研究に取り組む。さらに、ある学校で実際に営まれている校内研修について、その改善プランを策定する活動を展開する。	共同
		行 政 研 修 の 体 系 と 実 践	教育センター等で営まれている行政研修について、まず、文献や各種資料を参照して、その体系や実施上の手続き及び制約（予算、施設設備、参加者等）を整理する。その後、行政研修の事例を題材にして、その特徴と課題を多角度で分析する。そして、それらによって得られた行政研修の企画・運営に関する知見をもとに、受講者が協働して行政研修のプランニングに取り組む。	
学 校 支 援 の た め の 施 策 展 開		各教育委員会が学校支援のためにどのような事業を企画・運営しているか、その動向を整理する。また、いくつかの施策を取り上げて、その背景や経緯をまとめるとともに、その特徴と課題を明らかにする。さらに、大阪における学校支援のために必要な施策を構想する。		

スクー ルリー ダーシ ップ コー ス 科 目	グ ロー バル ス ク ール プ ロ グ ラ ム 科 目	グ ロー バル 時 代 の 教 師	グ ロー バル ス ク ール ・ リー ダー と し て 理 論 知 と 実 践 知 を 獲 得 す る た め、 (1) 国 際 社 会 の 動 向 と 世 界 の グ ロー バル 教 育、 (2) グ ロー バル 教 育 の 概 念、 プ ロ グ ラ ム と そ の 評 価 (3) 国 際 バ カ ロ レ ア、 ユ ネ ス コ ス ク ール、 S G H 指 定 校 の カ リ ク ー ラ ム や 運 営 に つ い て は 考 察 す る。 (4) 国 内 外 の 文 献 ・ デ ー タ を 収 集 し 批 判 的 に 分 析 す る。 そ の 上 で、 「 グ ロー バル 教 師 21 世 紀 型 ス キ ル 育 成 」 の 指 標 を 作 成 す る。	共 同
		グ ロー バル リ テ ラ シー の 育 成	異 文 化 理 解 プ ロ グ ラ ム や グ ロー バル 教 育 を 牽 引 す る 教 師 と し て の 資 質 や ス キ ル を 身 に 付 け る。 (1) 国 内 外 の P I S A 型 学 力 の 文 献 や デ ー タ の 分 析、 (2) 英 語 等 を も ち い た 幅 広 い 表 現 力、 デ ィ ス カ ッ シ ョ ン、 (3) 異 教 科 ・ 異 専 門 連 携 の C L I L 授 業 ・ 国 際 バ カ ロ レ ア WS 方 法 に つ い て 学 び、 コ ロ キ ア ム 運 営 を 計 画 す る。 演 習 全 体 の 自 己 省 察 と 他 者 変 容 に つ い て 量 的 ・ 質 的 研 究 を 行 う。	
		グ ロー バル プ ロ グ ラ ム の 開 発	グ ロー バル マ イ ン ド 育 成 プ ロ グ ラ ム を 企 画 ・ 運 営 で き る 教 員 を 育 成 す る。 「 グ ロー バル マ イ ン ド の 育 成 」 の 指 標 を 実 際 に 活 用 し、 ア ジ ア 等 の 海 外 教 育 機 関 と 連 携 し た グ ロー バル マ イ ン ド 育 成 プ ロ グ ラ ム の 協 働 開 発 を 行 う。 実 際 に 現 地 で の イ ン タ ビ ュー や 授 業 実 践 を 行 う 等、 21 世 紀 の 地 球 上 で お こ る 教 育 問 題 や 貧 困 問 題 な ど の 課 題 を 解 決 す る プ ロ グ ラ ム デ ザ イ ン を 開 発 し 実 行 す る。 こ れ ら プ ロ グ ラ ム 開 発 全 体 の 可 能 性 や 効 果 に つ い て、 質 的 研 究 法 を 用 い て 実 証 的 に 省 察 す る。 自 治 体 教 育 委 員 会 な ど の 成 果 共 有 を 行 う。	
	メ デ ィ ア ・ 情 報 リ テ ラ シー 教 育 プ ロ グ ラ ム 科 目	授 業 に お け る I C T 活 用 の 理 論 と 実 際	学 校 現 場 の タ ブ レ ッ ト 端 末 を 中 心 と す る I C T 機 器 の 導 入 は、 近 年 予 想 を は る か に 超 え て 急 速 に 進 ん で お り、 教 員 自 身 の 活 用 能 力 の 習 得 と 授 業 実 践 に お け る 活 用 の 両 面 で 喫 緊 の 課 題 と な っ て い る。 本 講 義 は、「 I C T 活 用 の 授 業 実 践 」 を テ ー マ に し て、 政 策 の 最 新 動 向、 カ リ ク ー ラ ム や 実 践 の 最 新 動 向 を、 諸 外 国 や 研 究 開 発 学 校 の 事 例 を 例 に し て 理 論 的 実 証 的 に 研 究 し た 上 で、 授 業 者 と し て の I C T 活 用 の 資 質 を 実 証 的 に 習 得 す る こ と を 目 的 と す る。	
		メ デ ィ ア ・ 情 報 リ テ ラ シー 教 育 の 実 践 的 展 開	ユ ネ ス コ は M e d i a a n d I n f o r m a t i o n L i t e r a c y (M I L) の 概 念 を 打 ち 出 し、 従 来 メ デ ィ ア ご と に 構 想 さ れ て い た リ テ ラ シー 教 育 を 融 合 さ せ る 必 要 と、 そ の 具 体 的 習 得 プ ロ グ ラ ム を、 教 師 教 育 用 に 提 唱 し て い る。 本 講 義 で は、 こ う し た 世 界 的 動 向 に 立 脚 し て、 こ れ か ら の 教 員 が 保 持 す る べ き M I L を、 理 論 的 ・ 体 験 的 に 学 び、 児 童 ・ 生 徒 の 指 導 に 活 か す 基 礎 的 資 質 と し て、 あ わ せ て 新 学 習 指 導 要 領 を 展 開 に 資 す る 資 質 と し て 習 得 す る こ と を 目 指 す。	
		メ デ ィ ア ・ 情 報 教 育 の 企 画 ・ 運 営	本 講 義 で は、「 授 業 に お け る I C T 活 用 の 理 論 と 実 際 」 お よ び 「 メ デ ィ ア ・ 情 報 リ テ ラ シー 教 育 の 実 践 的 展 開 」 で 習 得 し た 内 容 を、 校 内 研 修 や 教 育 セ ン タ ー の 研 修 を 通 し て、 他 の 教 員 に 習 得 し て も ら う た め に 必 要 な 研 修 デ ザ イ ン、 ファ シ リ テ ィ エ ィ ョ ン 手 法 を 学 ぶ こ と を 目 的 と す る。 そ の た め に、 実 際 の 研 修 を 企 画 ・ 実 施 ・ 評 価 す る と い っ た 実 際 的 な い し 模 擬 的 な 研 修 体 験 を 組 み 込 み、 受 講 後 に は 研 修 担 当 者 と し て 活 動 で き る 程 度 の 資 質 ・ 能 力 を 育 成 す る。	
援 助 ニ ー ズ 教 育 実 践 コ ー ス 科 目	コ ー ス 共 通 科 目	協 働 的 援 助 の 理 論 と 実 践	昨 今 の 教 育 現 場 の 状 況 は、 深 刻 な ケ ー ス が 増 え、 教 員 一 人 の 力 量 で は 子 ど も の 援 助 が 難 し い 場 合 も 多 く な っ て き た。 こ う し た 状 況 中 で 学 校 に お い て は チ ー ム で 対 応 す る こ と が 求 め ら れ て い る。 こ の 授 業 で は、 協 働 的 援 助 (チ ー ム 援 助) の 理 論 と 実 践、 子 ど も の ア ス セ ス メ ン ト に つ い て 講 義 と 演 習 か ら 考 え て い く こ と に す る。 そ し て、 援 助 の 効 果 を 把 握 す る た め に 統 計 的 な デ ー タ を 活 用 し な が ら エ ビ デ ン ス に 基 づ い た 教 育 実 践 に つ い て 考 え る。	
		社 会 環 境 と 子 ど も の 心 身 の 理 解	こ の 授 業 で は、 社 会 的 な 環 境 の 変 化 に つ い て ま ず 概 観 し、 そ の 変 化 が 我 が 国 の 子 ど も に ど の よ う な 影 響 を 与 え て い る の か に つ い て 明 ら か に す る。 そ し て、 ま ず は、 1 具 体 的 な 経 済 状 況、 社 会 状 況 の 変 化 が 子 ど も の 育 ち や 学 校 の 状 況 に ど の よ う な 影 響 を 与 え た か に つ い て 考 察 し、 次 に 2 こ う し た 課 題 を 子 ど も の 側 か ら 把 握 し、 適 切 な 援 助 者 と し て も 協 働 し な が ら、 子 ど も を 援 助 し て い く た め の 基 礎 知 識 を 学 ぶ。 そ し て、 3 受 講 生 が 学 校 現 場 で 出 会 っ た 子 ど も の 具 体 的 な ケ ー ス か ら、 状 況 を 把 握 し、 援 助 す る た め の 援 助 方 法 を 学 ぶ。 (オ ム ニ バ ス 方 式 ／ 全 15 回) (／ 6 回 う ち 1 回 共 同) ・子 ど も の 身 体 的 ・ 心 理 的 問 題 行 動 の ケ ー ス ス タ デ ィ 家 庭 環 境 と 学 習 面 の 課 題 を 持 つ 子 ど も の 理 解 と 援 助 家 庭 環 境 と 対 人 関 係 面 の 課 題 を 持 つ 子 ど も の 理 解 と 援 助 貧 困 の 課 題 あ る 子 ど も の 援 助 虐 待 の 疑 い あ る 子 ど も の 愛 着 を 考 慮 し た 援 助 ・ま と め の 討 論、 社 会 環 境 の 変 化 と 子 ど も の 援 助 (／ 5 回) ・社 会 環 境 の 変 化 の 現 状 分 析 家 族 の 状 況 の 変 化 が 子 ど も に ど の よ う な 影 響 を 及 ぼ す の か 日 本 の 家 庭 の 経 済 的 な 要 因 の 変 化 が 子 ど も に ど の よ う な 影 響 を 及 ぼ す か ・学 校 ソ ー シ ャ ル ワ ー ク の 実 際 ソ ー シ ャ ル ワ ー ク の 鍵 概 念 と 子 ど も の 援 助 ニ ー ズ ソ ー シ ャ ル ワ ー ク の 視 点 か ら み た 子 ど も と そ の 家 族 の ア ス セ ス メ ン ト ・行 政 や 福 祉 関 係 の 担 当 者 と 学 校 の 関 連 (／ 5 回 う ち 1 回 共 同) ・子 ど も の 心 身 の 理 解、 子 ど も の 側 か ら 見 た 社 会 環 境 の 変 化 ー 学 校 不 適 応 の 理 解 と 支 援 ー ・子 ど も の 日 常 生 活 習 慣 と 抑 うつ の 関 連 ・発 達 と 心 身 の 健 康 ・い じ め 被 害 ・ 加 害 か ら み た 子 ど も の 心 身 の 理 解	オ ム ニ バ ス

援助ニーズ教育実践コース科目	コース共通科目	児童生徒の発達と子どもの援助ニーズ	<p>幼児期から青年期までの発達を理解するための基礎的な理論枠組みと方法論を解説するとともに、学校教育および発達支援の実践的課題と関連づけながら議論する。前半では発達理解の基礎を資料をもとに解説し、後半に子どもの援助ニーズを発達の視点から理解し、支援につなげる手立てを学ぶ。授業計画では、認知発達・言語発達・社会性の発達など、心理学における研究領域をある程度わけているが、実際の発達過程とその支援は全人的・総合的な側面をもつため、特定の領域に限った議論ではなく、むしろ諸領域を総合的に理解する形で進めることとなる。期末課題では、これらの知識の定着とその応用力を問う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (/7回)</p> <ul style="list-style-type: none"> 発達を評価する：アセスメントの考え方と検査の概要 発達に課題のある子どもに対する支援の基本的考え方 学習面で困難を抱える子どもへの支援 言葉の理解・表出に困難を抱える子どもへの支援 対人関係に困難を抱える子どもへの支援 支援計画の立て方、効果検証、および改善計画の立案 <p>(/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> 認知・思考の発達に関する理論と研究 言語発達に関する理論と研究 <p>(/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会的発達に関する理論と研究 自己の発達に関する理論と研究 	オムニバス
	いじめ・不登校・問題行動対応プログラム科目	いじめ・不登校・問題行動を示す子どもの援助ニーズ	<p>いじめの構造・過程、不登校の現状、そして問題行動の理論的背景について解説する。いじめは加害側と被害側のみではなく、観衆・傍観者も含む集団問題である。不登校は、学習面の置き、いじめ被害、対人関係の困難など様々な側面に気を配る必要がある。問題をかかえる子どもには、表に現れている行動だけでなく、愛着の形成、対人関係の課題、学習の課題に留意する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (/7回)</p> <ul style="list-style-type: none"> いじめの定義とその取り組みの歴史 いじめの発見の方法と援助 いじめの予防プログラム ネットいじめと関連する問題 いじめを予防する取り組み <p>(/8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> 不登校の現状 事例に基づく対応の実際 タイプ別に考える不登校 - 葛藤のある不登校と葛藤のない不登校 問題行動の現状、仕組みと対応 不登校・問題行動を予防する方法 	オムニバス
		学校危機における援助ニーズ	<p>学校における危機、その予防と対応について論じながら、トラウマ体験からの回復に向け、援助ニーズの観点から支援と実践のあり方について理解が進むように講義する。三段階の予防の考え方をもち、危機を予防、回避、影響を緩和するための一次予防、危機時の即時対応についての二次予防、中長期の回復と再発防止に向けた三次予防の理解をすすめる。トラウマ・インフォームド・ケアのフレームワークをもとにして、支援ニーズについて再認識する。</p>	
		予防的な関わりと協働的援助	<p>いじめ、不登校、学校危機をどのように予防するかについて考える。予防的な関わりは、子どもの援助ニーズの大きさにより、1) 集中的なケアが必要な子ども、2) 個別的で予防的な関わりで援助できる子ども、3) 学級や学年全体への予防プログラムに参加することで効果が期待できる子どもの3層構造で捉える。子どもの発達や適応を促進するような予防的・開発的なプログラムを学校現場のニーズを踏まえて実践し、その効果を検証する。そして、こうした予防的な関わりを協働的な援助に結びつけていく。</p>	
	子どもの障がい・健康課題対応プログラム科目	障がいや健康課題のある子どもの援助ニーズ	<p>教職員が身体障がい、知的障がい、発達障がい等の多様な障がいのある子どもや、現代的な健康課題のある子どもを理解し、適切な指導と必要な支援を行うための理論と知識を取り扱う。障がい特性や健康課題のある子どもを支援するために、主として子どもの内的要因に着目し、個別の子どもの援助ニーズに応じた学校教育活動のあらゆる場面を想定した具体的な方策を思考する。</p>	オムニバス
		メンタルヘルス課題の理解	<p>子どものメンタルヘルス上の課題に関する理論や知識を取り扱う。まずは、子どもの精神発達を理解した上で、予防医学的な観点から日常の精神的健康を保つためのストレスの対処法や対人関係、生活での留意点などを学ぶ。さらに、様々な児童思春期に見られる精神疾患、発達障がい、虐待・PTSDなどの知識を習得する。そして、学校でしばしば問題となってくる不登校、いじめ、自傷・自殺、問題行動などあらゆる子どもの援助ニーズとも関連づけるとともに、子どもを支える保護者や教職員のメンタルヘルスについても理解を深める。</p>	
		共生社会をめざした協働的援助	<p>様々な子どもの個性や多様性を認め、その個性や多様性に応じた必要な支援や援助が学校が中心的な役割を担いつつ、関係諸機関との連携のもとに提供していくことが求められている。関係者とのチーム援助に必要な知識や技能を学ぶとともに、多様性を有する子ども達が豊かな人間性を育み生きる力を身に付けていくためのPDCAサイクルに基づく個別の支援や援助方法についても理解を深める。</p>	オムニバス

援助ニーズ教育実践コース科目	養護プログラム科目	養護実践の理論と方法	<p>講義・演習を通して、医学や看護学の治験から、子どもの発育・発達段階に合わせた疾病や傷害の特徴とその課題を理解し、子どもの援助ニーズに応じたフィジカルアセスメントとケア及び処置の方法についての事例検討を通して実践的な知識及び技能を習得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (/10回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会復帰過程における疾患のある子どもと家族の援助ニーズ ・子どもの疾病についての理解と援助ニーズ ・学校突然死についての理解と援助ニーズ ・食中毒の理解と援助ニーズ ・熱中症の理解と援助ニーズ (/5回) ・外傷を負った子どもの理解と援助ニーズ 	
		子どもの疾病・傷害と援助ニーズ	<p>講義・演習を通して、医学や看護学の治験から、子どもの発育・発達段階に合わせた疾病や傷害の特徴とその課題を理解し、子どもの援助ニーズに応じたフィジカルアセスメントとケア及び処置の方法についての事例検討を通して実践的な知識及び技能を習得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (/10回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会復帰過程における疾患のある子どもと家族の援助ニーズ ・子どもの疾病についての理解と援助ニーズ ・学校突然死についての理解と援助ニーズ ・食中毒の理解と援助ニーズ ・熱中症の理解と援助ニーズ (/5回) ・外傷を負った子どもの理解と援助ニーズ 	オムニバス
		子どもの心身の健康における予防的な関わりと協働的援助	<p>子どもの心身の健康に対して、養護教諭が予防的な観点から子どもに関わり、協働的に援助する具体的な方法を学修させる。主として子どもの心身の健康に関する集団的保健指導を予防的な関わり、チーム援助・コーディネート・学級担任及び保護者など校外の関係者との連携・協働を養護教諭の協働的援助ととらえ講義・演習し、子どもの援助ニーズとなる健康課題を未然に防ぎ、再発防止・学校適応までを支援する養護実践力を育成、評価させる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (/12回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの心身の健康における予防的な関わりと協働的援助の意義 ・子どもの心身の健康課題を見出す方法 ・養護教諭が行う協働的援助 ・協働的援助に関する養護実践の評価方法 (/3回) ・予防的な関わりとしての集団的保健指導 ・予防的な関わりとしての集団的保健指導の評価方法 	オムニバス
	就学前教育プログラム科目	就学前教育の政策・システム	<p>修学前の子どもを大切に守り育てるために、近年、どのような政策とシステム構築が、地方自治体レベルで取り組まれているのかを概観する。保育・教育の連携と接続、地域住民や諸機関とのつながりの全体像を提示し、接続期のカリキュラムの先駆的な事例をふまえ、新しい時代の実践を構想する基礎を培う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (/10回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育制度改革の動向 ・乳幼児期の育ちと教育・保育の必要性 ・幼稚園・保育所等の役割 ・自治体における就学前政策の取組み ・就学前の教育・保育現場での連携・協働を考える ・保幼小の連携・協働を考える ・教育・保育の専門職の育ち ・新しい時代の教育・保育の実践の構想 (/5回) ・自治体における就学前政策の取組み 	オムニバス
		就学前の援助ニーズへの多様な支援	<p>発達や文化の多様性に配慮した共生保育及び子育て支援の先駆的な実践事例をふまえ、そのなかにおける子どもや保護者の姿及び保育者の専門性について共に学ぶ。これからの時代の共生保育の課題を見すえ、特に、互いを理解する「表現」に関する新たな実践を創造するための基礎を培う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (/10回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多文化に関する援助ニーズへの対応 ・発達に関する援助ニーズへの対応 ・保護者と乳幼児のかかわりに関する援助ニーズへの対応 (/5回) ・互いを理解する「表現」に関する新たな実践 	オムニバス
		就学前教育と福祉の協働	<p>今までも、保育者は、各家庭の事情がわかるがゆえに、保護者に寄り添い問題解決への支援をしてきた。そこに、ワークライフバランスや家族のあり方に関する識見と、ソーシャルワークを軸とした諸機関・専門家との協働を明確に位置づけることで、支援をより効果的にしていく基盤を培う。</p>	

学習開発研究 (国語)	音声による表現、文字による表現の実相をとらえながら、その受容の問題を中心に、国語科教育の表現領域の実践課題について考察する。	
学習開発研究 (算数)	小学校から高等学校までの数学学習内容の関連性・発展性について、演習を取り入れ講義する。	
学習開発研究 (音楽)	音楽科の目標・内容・方法・評価などに関する概論および各論を通じ、教授・学習理論をいかに構築するかについて講ずる。	
学習開発研究 (図画工作)	生涯教育へとつながる図画工作や美術教育の役割や実践課題について解説し、子どもたちの造形表現活動をより豊かなものにするために、伝統工芸をテーマに実習および教材研究を通して、技術力と応用力、実践力の育成を目指す。	
学習開発研究 (体育)	体育科の目標・内容・評価の方法論について学習し、子どもの発育・発達を助長する体育の授業方法について考察する。	
学習開発研究演習 (国語)	近大国語科教育の歴史をふりかえりながら、多角的な視点から国語科教育実践をとりあげ、今日の国語科教育のあり方について具体的に考察する。	
学習開発研究演習 (英語)	最新の「第2言語習得理論 (SLA)」について文献を購読し、「小学校外国語科」「小中連携の外国語科」について授業開発と授業作りを行う。 1) 文構造への気づき、2) 他教科の内容を活用したCLIL (内容言語統合型学習) 3) 音韻認識とフォニックス指導、4) 中学校の英語4技能を統合した指導についても扱う。 また、英語をもちいて海外で授業を行う短期海外研修への示唆について触れる。	
学習開発研究演習 (算数)	算数・数学の学習内容を、数学を土台とし発展的にとらえ演習を混じえ理論的に考察する。	
学習開発研究演習 (音楽)	学習開発研究 (音楽) を踏まえ、音楽科の教授・学習理論を実践化する方途を探る。	
学習開発研究演習 (図画工作)	学校教育、社会教育現場における子どもの造形表現活動からテーマを設定し、子どもたちの造形表現活動を豊かにするためのカリキュラム・指導法について考察する。	
学習開発研究演習 (体育)	学習開発研究で開発した学習教材を用いて授業実践した場合の効果と学習教材としての有用性について考察する。	
教科内容開発研究 (英語)	作成中	
教科内容開発研究 (社会)	社会科の教科内容に関する学術的な諸論文を講読する。受講生自らが講読する論文を見付け出し、レジュメに要約をまとめ報告し、自分の見解を述べる。ディスカッションを通じて、社会科の在り方を考えていく。	
教科内容開発研究 (理科Ⅰ)	理科物理分野の内容及び指導方法における国内外の研究成果を取り上げ、現状と課題並びに改善方法について検討する。 アメリカで物理教育研究の成果に基づいて開発されたテキスト“Tutorials in Introductory Physics”や“Physics by Inquiry”、イギリスの“Thinking Science”などの実践例をもとに、物理教育でどのようにアクティブラーニングを実現していくのかを検討する。	
教科内容開発研究 (理科Ⅱ)	理科生物学分野において学ぶ生命科学の進歩が、人や人間社会に与える影響が問題となっている。また人間の活動が、環境や動植物に与える影響も問題となっている。それらの基礎を学ぶとともに、授業でどのように取り扱うかについて検討する。	
教科内容開発研究 (理科Ⅲ)	理科地学分野の内容及び指導方法における最新の研究成果を取り上げ、現状と課題並びに改善方法について検討する。	
教科内容開発研究 (音楽)	人間体験の蓄積としての音楽文化と、児童の生命表現としての音楽行為とを、授業を通して結びつける基礎原理を考察する。	
教科内容開発 研究演習 (英語)	作成中	
教科内容開発 研究演習 (社会)	社会科の単元を取り上げ、受講生各自がテーマを設定し授業づくりを行う。指導案の作成と模擬授業の実施、批評会を通じて「授業力」を身に付け、高めていく。	

天王寺キャンパス開講教科関係科目	教科内容開発 研究演習（理科Ⅰ）	理科物理分野の内容及び指導方法を実験や教材作製等を通して検討する。幼・小・中・高への接続、幼児期・低学年期の科学教育、他教科との合科的指導方法、さらに小学校でのプログラミング教育をどのように物理教育の中で実践していくかについての知見を深める。	
	教科内容開発 研究演習（理科Ⅱ）	理科生物学分野の野外観察の指導方法等について、演習や実習を通して検討する。	
	教科内容開発 研究演習（理科Ⅲ）	理科地学分野の内容及び指導方法を演習や実習等を通して検討する。	
	教科内容開発 研究演習（音楽）	種々の楽器に触れながら、身体からの働きかけが音表現に生まれかわる瞬間を分析する。	
課題研究科目	実践課題研究Ⅰ	受講生に、教職大学院における1年次での学びの成果を踏まえて、自らの実践的な研究課題に対する問題意識がどのように発展してきたかを省察させる。そして、それをさらに追究させるための計画を立案させ、遂行させる。その過程において、課題解決のプロセスをPDCAサイクルに基づいて自己点検・評価させるとともに、教育委員会のスタッフ等とのコミュニケーションの中で相対化させる。それらを通じて、自らの実践的な研究課題の解決を幼稚園・学校や地域の教育課題の解決とつなぐ意識を育てる。	
	実践課題研究Ⅱ	受講生に、実践課題研究Ⅰの成果と課題を整理させる。そして、それに基づいて、実践的な研究課題の解決のための計画を修正させ、遂行させる。その過程においても、課題追究のプロセスを、PDCAサイクルに基づいて自己点検・評価させるとともに、教育委員会のスタッフ、当該課題を専門的に研究しているコミュニティ等とのコミュニケーションの中で相対化させる。これらを通じて、自らの実践的な研究課題の解決を学校や地域の教育課題の解決とつなぐ意識をさらに育てる。	